

生徒と学校の全職員との人間関係づくり

個々の生徒が背負っている育ちの違い、価値観の多様化、成長過程での生活体験の差、現在置かれている生活の質の違いなど、個を取り巻く状況は近年、ますます複雑になっており、教師は様々な点で個別の対応を迫られています。「子どもは一人一人異なる」ということを認識した上で、より多角的な見方や捉え方が必要になります。学校内で子どもに関わる大人は教師だけではありません。学校という一つの社会の中で、「みんなで子どもを育てようじゃないか」という土壌を作る必要を感じます。そこで、生徒に最も近い位置にいる担任は、生徒を取り巻く学校の全職員と積極的に連携を図ることを大切にしていきたいと思います。

学年主任

担任同様、生徒を温かくかつ厳しく見守ってもらう存在です。そのためには、個人の些細な出来事を事細かに伝え合ひましょう。担任なりの思いを伝えておくことも大切です。生徒の問題行動に対しても「担任はこう思う」けれど「主任はこう思う」などと、場合によっては生徒の前で異なる見方や考え方を提示することがあっても良いと思います。一方で、「担任の先生は主任の先生を頼りにしているんだなあ」と感じさせることも大切です。

校務員

教室内で物が壊れたり（壊したり）故障したりして自分たちの手に負えない時は、生徒をすぐ校務員室に走らせます。校務員さんが作業をする手つきをじっと見ていたり、時には一緒に作業をさせてもらったりする機会にもなります。生徒が見ていない所での作業は、その経緯や苦勞を伝えます。最後にちゃんとお礼を言うことも教えましょう。

養護教諭

体は勿論のこと、心が安らぐ場として保健室は重要な存在です。そのためにも、保健室の使い方については生徒も職員も共通理解とルール作りが必要です。養護教諭との連絡を密にするだけでなく、保健室の前を通るたびにのぞき、中にいる生徒に声をかけたり、「保健室の使用（来室）状況」にも必ず口を通すようにします。保健・安全に関する授業にTTとして入ってもらう機会なども積極的に設けていきたいと思います。

生徒

調理員・栄養士

給食室に食器を片づける時には「ごちそうさまでした」「ありがとうございました」等の声かけを励行させましょう。給食室での仕事ぶりを見学させてもらったり、毎日の仕事に対する思いや苦勞を語ってもらうなど接点を意図的に作りましょう。「総合的な学習の時間」の中で、「環境」や「健康」といった分野を扱う場合は、この上なく強力な協力者になっていただけるはずです。

教科担任

各教科の授業での様子の交流はもちろんのこと、学級での出来事や個人の様子も積極的に伝えます。「授業がうまくいかないのは学級集団が悪いから」というネガティブな考え方ではなく、「自分の教科でこの学級を伸ばす」というポジティブな考え方で、互いの教科経営をしましょう。

図書整理員

本の紹介等で生徒とは日常的に関わりながらも、生徒を評価する人でない分だけ、生徒たちはありのままの思いをぶつけたり、遠慮のない態度で接することがあります。だからこそ、子どもたちの本音を知る上では欠かせない存在です。時には「担任には言ってほしくない」という条件付きでこっそり知らされることもあります。生徒との約束を守りつつも、内容によっては、生徒本人に自分から先生に相談するように促すことも必要になります。

教師も、一人の人間です。「完璧」「絶対」はあり得ません。だからこそ、互いの足りないところを補いつつ、共に歩いていこうとする姿勢が必要です。

「子どものしつけ」は、大人の行動を鑑としたものです。挨拶や言葉づかいをはじめ、何かにこつこつ取り組む姿勢、協力する姿勢など、子どもは大人の行動を見て、手本としています。間違いや失敗を繰り返しながらも、「こんな子どもにしたい、こんな学校にしたい」という願いや理念をもちつつ努力し続ける学校職員集団。それが、子どもにとって何よりの手本となります。

<参考文献>

- ・『言葉のしつけ』 大岡 信 他 小学館
- ・『人権とは?』(人権学習ブックレット) 中川 真代子 明石書店
- ・『教育』 2000年 4月号
- 2000年 8月号 国土社

